米づくり情報（ＮＯ．４）

令和７年８月１日

伊万里・西松浦地区農業技術者連絡会作物部会

１　気象概況（アメダス観測地：伊万里）

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
7	1	24.8	28.6	28.4	34.2	22.0	24.4	97.6	0.0	15.6	58.8
	2	25.5	28.4	29.2	33.5	22.6	25.0	84.3	18.5	19.2	41.7
	3	26.1	26.8	30.0	31.0	23.1	23.9	59.0	22.5	23.5	23.4
	4	26.7	27.7	30.9	31.9	23.5	24.3	42.4	80.0	28.3	26.4
	5	27.2	29.2	31.6	34.5	23.9	24.4	39.1	0.0	32.3	58.5
	6	27.6	-	32.1	-	24.2	-	44.3	-	41.4	-

【７月１半旬～７月５半旬の気象概況】

・気温は、平年より高い。

・降水量は、定期的に夕立があったものの、平年比５０％と少ない。

・日照時間は、平年比 176%と多い。

２　生育状況（７月 28 日）

項目 品種(設置場所)	移植日	年　次	草　丈（ｃｍ）	茎数（本／㎡）	葉齢（L）	葉色 SPAD	概　　要（平年との比較）
夢しずく 東山代町脇野	6/1	本年値 平年値 平年比(差)	85.3 93.1 92	503 359 140	13.3 12.9 (+0.4)	34.2 35.8 (-1.6)	・草丈は、やや低い ・茎数は、多い ・葉齢は、やや進んでいる ・葉色は、やや淡い
ひなたまる 大坪町古賀	6/24	本年値	62.4	491	11.4	40.1	※今年度調査開始のため、平年値なし

（耕種概要）

・「夢しずく」「ひなたまる」の耕種概要は稲作情報 No.1～３を参照。

【情報田ウンカ類調査結果（25 株あたり）】（調査日７月 28 日）

品種	地域	移植日	トビイロウンカ（成虫）	セジロウンカ（成虫）	ヒメトビウンカ（成虫）	ウンカ類（幼虫）
夢しずく	東山代	6/1	0	0	0	0
ひなたまる	大坪	6/24	0	0	0	0

３　参考（平坦部　佐賀県農業試験研究センター）（７月 30 日）

令和７年７月 31 日

佐賀県農業試験研究センター　本場

本年産水稲の生育状況（７月 30 日）

移植日	項目／品種	年次	草丈 cm	茎数 本／㎡	葉齢 L	葉色 SPAD	概況（平年または前年との比較）
6月18日	夢しずく	本年	77.9	363	11.5	40.5	[気象] 7月23日～29日まで ◆平均気温…2.9℃高い ◆日照時間…長い（平年比 176%） ◆降水量…少ない（平年比 0%） [生育] ◆草丈 全品種で高い。 ◆茎数 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」は少なく、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は多い。 ◆葉齢 「夢しずく」は平年並み、その他の品種はやや進んでいる。 ◆葉色(SPAD 値) 「夢しずく」はやや濃く、「ヒノヒカリ」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ひなたまる」はやや淡い。
		平年	72.6	415	11.5	39.1	
		平年比(差)	107	87	(±0)	(+1.4)	
	ヒノヒカリ	本年	70.3	462	11.9	39.7	
		平年	66.4	545	11.5	40.1	
		平年比(差)	106	85	(+0.4)	(−0.4)	
	ひなたまる	本年	70.4	453	12.2	41.3	
		前年	62.0	335	12.0	42.8	
		前年比(差)	114	135	(+0.2)	(−1.5)	
6月20日	さがびより	本年	70.0	579	11.8	40.3	
		平年	63.3	535	11.6	39.9	
		平年比(差)	111	108	(+0.2)	(+0.4)	
	ヒヨクモチ	本年	66.3	893	12.3	40.2	
		平年	58.5	824	12.1	40.8	
		平年比(差)	113	108	(+0.2)	(−0.6)	

留意点
○「夢しずく」は幼穂形成期を迎えているため、穂肥診断に基づき遅れないように穂肥を施用する。 ○「ひなたまる」「ヒノヒカリ」「さがびより」「ヒヨクモチ」等の中晩生品種は、中干しが終わり次第、間断潅水に切り替える。茎数が少ない圃場では中干しはやや軽めにとどめ、幼穂形成期前には終了する。 ○病害虫の発生に注意する。農業技術防除センターの情報を参考にするとともに、圃場の観察により防除を的確に行う。

注 1)「夢しずく」、「ひなたまる」、「ヒノヒカリ」は、6 月 18 日移植の稚苗（播種期 5/26, 播種量　湿籾 180g/箱）
「さがびより」、「ヒヨクモチ」は、6 月 20 日移植の稚苗（播種期 5/27 播種量　湿籾 180g/箱）

2)栽植密度：「夢しずく」は、条間 30 cm×株間 17 cm, 19.6 株/㎡（65 株/坪）
「ひなたまる」は、条間 30 cm×株間 18 cm,18.5 株/㎡(60 株/坪)
「さがびより」は、条間 30 cm×株間 20 cm, 16.7 株/㎡（55 株/坪）
「ヒノヒカリ」「ヒヨクモチ」は、条間 30 cm×株間 15 cm, 22.2 株/㎡（73 株/坪）

3)栽培管理：施肥法は県基準に準じ、防除他はセンターの慣行による。

4)平年値は、収量について過去の全試験年次の標準偏差(σ)を算出し、±1σの外側にある年次を除く年次を対象にした、各項目の単純平均値。

5)「ひなたまる」については R6 年産から試験開始のため、前年との比較。

6)概況欄の平年値との比較については、以下のように定義している。
低い（少ない）：94 以下、やや低い（やや少ない）：95～98、平年並み：99～101、
やや高い（やや多い）：102～105、高い（多い）：106 以上。

４ 今後の管理

１）山間早植え水稲（５月上中旬移植）

- 穂ばらみ期～出穂期となっている。
- 最も用水量が必要な時期であるため、出穂 10 日後までは間断灌水の湛水期間を長めにとる。出穂開花期頃の干ばつは、不稔籾の増加の原因となるため、用水確保が重要となる。
- 用水確保が難しい地域は、出穂後 1～3 日、出穂後 10 日～15 日、できれば糊熟期（粒を押しつぶすと粘り気の強い糊状となる時期）に重点的に走水を行い、被害の軽減に努める。
-

２）普通期水稲「夢しずく」

・幼穂形成始期（幼穂長 1 ミリ）を迎えた圃場では、次の表を参考に穂肥診断を実施し、適切に穂肥を施用する。

≪夢しずく　穂肥診断基準≫

幼穂形成始期の草丈(cm)	葉色		施用時期		穂肥施用量（kg／１０ａ）	
	群落	SPAD-502	出穂前日数	幼穂長	窒素成分量	BB602
	3.0以下	３４以下	22～20日前	１ mm	３．０	１８ kg
７３cm以下	**3.0～3.5**	**３８以下**	**20～18日前**	**２ mm**	**３．０**	**１８ kg**
	3.5～3.8 3.8以上	38～39 ４０以上	15～14日前 晩限は止葉抽出終了まで	10～15mm	1.5～2.0 1.0以下	10 ～12kg ６ kg
７３～７９cm	3.0～3.5 3.5～3.8 3.8以上	３４以下 38～39 ４０以上	20～18日前 15～14日前	２ mm 10～15mm 施用しない	1.5～2.0 １．０	10～12kg ６ kg
８０cm以上	原則として施用しない					

【穂肥診断の方法】

①幼穂形成始期頃の草丈を測る。

②葉色（群落・SPAD 値）を測る。

③上記①②の測定値を診断指標に当てはめ、施用量を確認する。

④施用量を確認したら、基準の施用時期に穂肥を施用できるよう準備する。

⑤穂肥は、湛水状態で施用し最低 4 日間は止水し、落水しない

３）普通期水稲「ひなたまる」

- 有効茎（茎数が 1 株 20 本程度）が確保できた圃場から順次中干しに移行する。
- ガスわき対策として移植後 15 日、25 日頃は落水などを行い、根の活力を高める。ただし、用水確保が難しい地域では、落水せずに湛水状態を保つようにする。
- 梅雨明けし、高温と乾燥が予想される。深い亀裂が入り、土壌が白乾するほどの強い中干しは、断根につながるため、中干しの強度は、軽く足跡がつく程度の黒乾燥状態を保つ程度とする。（用水の確保が難しい地域は、自然落水とし、水尻は完全に落とさないようにする。）
- 移植後の大雨等でオーバーフローにより除草剤処理後の水管理が徹底できなかった圃場で、雑草の発生が見られる場合は、速やかに中後期除草剤による防除を実施する。

・紋枯病が多発する圃場や、多肥・過繁茂の圃場は発生消長によっては被害が大きくなる可能性があるため、基幹防除と発生状況に応じた臨機防除を徹底する。

・幼穂形成始期（幼穂長１ミリ）を迎えた圃場では、次の表を参考に穂肥診断を実施し、適切に穂肥を施用する。

≪ひなたまる　穂肥診断基準≫

幼穂長1mm時の草丈(cm)	施　用　時　期		穂肥施用量（kg／１０ａ）	
	出穂前日数の目安	幼　穂　長	窒素成分量	BB602
８０cm未満	２０～２１日前	2～3mm	３．０	１８　kg
80～85cm	18日前	4～5mm	２．０～１．０	6～１２kg
85cm以上	原則として施用しない			

【穂肥診断の方法】

①幼穂形成始期頃の草丈を測る。

②①の測定値を診断指標に当てはめ、施用量を確認する。

④施用量を確認したら、基準の施用時期に穂肥を施用できるよう準備する。

⑤穂肥は、湛水状態で施用し最低４日間は止水し、落水しない

※ひなたまるは葉色が濃いため、草丈が 80cm 未満であれば、群落葉色が「4.0 以上」（葉緑素計 41 以上）であっても基準量を施用する。

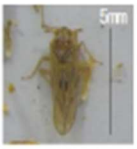
4）共通

病害虫発生予察情報予報第４号（8 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

6 月 1 日～8 月 31 日の３か月間は農薬危害防止運動期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

Ⅰ．予報の概要および各作物の特記事項

作 物 名	病 害 虫 名[注1]	8月の予想発生量[注2] 平年比	予報対象の病害虫（抜粋）
水稲（早期）	紋枯病	並	斑点米カメムシ類 クモヘリカメムシ　ホソハリカメムシ
	斑点米カメムシ類	やや多	
水稲（山間早植え）	穂いもち	並	
	紋枯病	やや多	
	トビイロウンカ	並	
	コブノメイガ	やや多	
	斑点米カメムシ類	やや多	
水稲（普通期）	穂いもち	並	 トビイロウンカ イネカメムシ
	紋枯病	やや多	
	白葉枯病	並	
	もみ枯細菌病	並	
	トビイロウンカ	並	
	コブノメイガ	やや多	
	フタオビコヤガ	並	
	斑点米カメムシ類	やや多	
	1．斑点米カメムシ類 水稲の出穂 10 日前までに畦畔を含めて除草を行うとともに、乳熟期（穂揃い期の約 10 日後）を中心に薬剤防除を行う。多発生の場合は穂揃い期とその 7～10 日後に薬剤防除を行う。 **2．イネカメムシ** 他の斑点米カメムシ類と異なり、水稲の出穂始めに籾を吸汁して不稔を生じさせることから、出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の防除を行う（令和 7 年 7 月 14 日付け病害虫対策資料第 8 号参照）。 **3．紋枯病** 近年、多発傾向にあるため、各圃場における発生状況を確認し、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展する時期（液剤、粉剤の場合は出穂 20～10 日前を目安とする）に防除を徹底する。	
水稲全般	**1．トビイロウンカ** 本種の発生状況は、田植え時期、水稲の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図（共通-図 1）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、幼虫ふ化揃い期の防除を実施する。		

（紋枯病）

- 8 月の気象予報では、気温が高く、**多発生条件**となっている。
- 近年、多発傾向にあるため、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展（垂直進展）する時期に防除を徹底する。（液剤、粉剤の場合は出穂 10～20 日前を目安とする）
- 病斑が上位３葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

（斑点米カメムシ）

- 県内全域で発生が見られ、斑点米の発生による等級低下が懸念される。
- 気温が高く推移しており、今後も斑点米カメムシの発生・加害に好適な条件が続くため、警戒が必要。
- 圃場周辺の畦畔、休耕田、空き地等の雑草は斑点米カメムシ類の増殖・飛来源となるため、除草作業を出穂 10 日前までに行う。出穂直前以降の除草は水田内への斑点米カメムシ類の侵入を助長するため避ける。
- 薬剤防除は乳熟期（穂揃い期の約 10 日後）を中心に行うが、発生が多い圃場では穂揃い期と乳熟期（穂揃い期の 7～10 日後）の２回薬剤防除を行う。

写真1　ホソハリカメムシ

写真2　クモヘリカメムシ

写真3　アカスジカスミカメ

写真4　イネカメムシ

表１　斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数（2025年7月17日～24日）

調査地点	場所	草種	ｸﾓﾍﾘｶﾒﾑｼ		ﾎｿﾊﾘｶﾒﾑｼ		ｼﾗﾎｼｶﾒﾑｼ類		ｱｶｽｼﾞｶｽﾐｶﾒ		ﾐﾅﾐｱｵｶﾒﾑｼ	ｲﾈｶﾒﾑｼ	
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	成虫	幼虫
佐賀市西与賀町	空地	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	0	0	5	0	0	0	9	0	0	0	0
佐賀市東与賀町	空地	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	10	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0
小城市三日月町	河川敷	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	3	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
唐津市鎮西町1	畦畔	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
神埼市神埼町	道端	オヒシバ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
鳥栖市三島町	畦畔	オヒシバ	0	0	3	0	0	0	119	111	0	0	0
多久市南多久	畦畔	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0
伊万里市二里町	空地	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊万里市二里町	空地	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0
伊万里市東山代町	空地	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	6	2	6	0	0	0	45	4	0	2	0
伊万里市松浦町	空地	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0
武雄市橘町	空地	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	8	2	18	0	0	9	12	2	0	0	0
武雄市橘町	空地	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	0	0	2	0	1	0	7	0	0	0	0
鹿島市	河川敷	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	0	0	4	0	0	0	17	12	0	0	0
嬉野市嬉野町1	空地	オヒシバ	0	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0
上峰町	畦畔	オヒシバ	0	0	1	0	0	0	5	12	0	0	0
白石町1	河川敷	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	0	0	14	1	0	0	42	14	1	0	0
白石町2	河川敷	ｴﾉｺﾛｸﾞｻ類	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0
本年（平均）			1.7	0.6	4.1	0.1	0.1	0.6	14.2	8.6	0.2	0.2	0.0
平年（過去10年の平均）			2.5	2.6	1.3	0.4	0.2	0.6	14.1	8.6	0.03	0.0	0.0
平年比			やや少	やや少	多	やや少	やや少	やや多	並	並	多	多	並
前年（平均）			5.8	6.9	3.6	0.9	0.4	0.1	13.3	5.8	0.0	0.0	0.0

（イネカメムシ）

病害虫対策資料第8号

佐農技防第353号
令和7年7月14日

各関係機関長　様

佐賀県農業技術防除センター所長

イネカメムシの県内における発生状況について

イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシ類の一種で、昨年本県において広く分布していることを確認しています（写真1）。本種は、水稲の出穂始めに籾を吸汁して不稔にし、大きな減収被害を生じさせるなど、他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が重要です。本年7月上旬の早期水稲の調査において、本種の発生を確認したことから、県内での被害の発生が懸念されます。

ついては、本種による被害の発生するおそれが比較的高いと考えられる山間、山麓部地域においては、本種の発生に留意するとともに、下記を参考に防除対策を徹底するよう、生産者への指導をお願いします。

記

１．イネカメムシの発生状況

令和7年7月10日に実施した県内3地点の早期水稲18圃場での捕虫網によるすくい取り調査では、イネカメムシ成虫が1圃場で認められた（表１）。また、昨年8月上旬の調査では同3地点全てで本種の発生を認めている。

２．イネカメムシによる被害の特徴

本種は、出穂直後から加害することで不稔籾を生じさせ、被害が甚だしいと大きな減収を引き起こす。また、穂揃期以降は、基部斑点米を生じさせ、等級格下げの原因となる。

３．防除対策

１）圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周辺より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。

２）出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。

３）出穂後に本種の発生を認めた圃場では、発生状況に応じて通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除を行う。|

写真１　イネカメムシ成虫【A】及び幼虫【B】、基部斑点米【C】
成虫の体長は13㎜前後

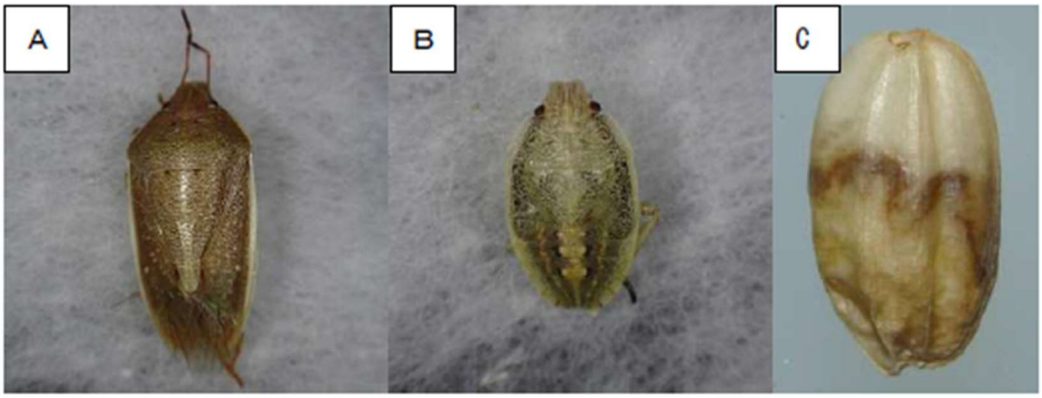


表１　斑点米カメムシ類の水田におけるすくい取り調査結果

調査地点	品種	生育ステージ	20回すくい取り虫数（調査日：令和7年7月10日）											
			イネカメムシ		クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカスジカスミカメ		アカヒゲホソミドリカスミカメ	ミナミアオカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	成虫
A-1	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A-2	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A-3	コシヒカリ	出穂前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A-4	コシヒカリ	出穂前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A-5	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0	0	0
B-1	コシヒカリ	出穂前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B-2	コシヒカリ	出穂前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
B-3	コシヒカリ	出穂前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B-4	コシヒカリ	出穂前	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B-5	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
B-6	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B-7	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C-1	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
C-2	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C-3	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C-4	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C-5	コシヒカリ	出穂期	1	0	1	0	0	0	1	0	5	0	0	2
C-6	コシヒカリ	出穂期	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0

水稲の生育ステージ：出穂前～出穂期

（いもち病）

・7 月に入り好天が続いているため、感染好適条件は発生していないが、常発地帯では引き続き注意して圃場を観察する。

BLASTAM情報第4号（葉いもち感染好適条件の出現状況）（2025年7月16日更新）

月	日	佐賀					福岡			長崎	
		唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	前原	太宰府	久留米	松浦	佐世保
7月	1日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	2日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	3日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	4日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	5日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	6日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	7日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	8日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	9日	ー	3	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
	10日	ー	3	ー	2	ー	ー	ー	3	3	ー
	11日	ー	ー	ー	ー	3	ー	ー	ー	ー	ー
	12日	3	ー	ー	ー	ー	ー	3	ー	ー	3
	13日	ー	3	ー	ー	ー	3	ー	3	3	ー
	14日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	3	3	ー	ー
	15日										
	16日										
	17日										
	18日										

1：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前５日間の平均気温が20℃未満）
2：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前５日間の平均気温が25℃以上）
3：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温が15～25℃の範囲外）
4：準好適条件（湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い）
●：好適条件（湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した）
ー：好適条件の出現なし
？：判定不能

BLASTAMの活用方法
(1) BLASTAMは、気象条件（アメダスデータ）のみによって葉いもちの発生を予測するシステムである。しかしながら、実際の圃場における葉いもちの発生には、気象条件の外にも、菌の多少（密度）、イネ品種による抵抗性や体質、薬剤防除条件などが大きく関与している。したがって、BLASTAMは、あくまでも葉いもち発生予察の参考資料の一つとして扱う。
(2) BLASTAMは、葉いもちを対象としており、稲の移植約20 日後を起点とした35 日間（6 月15 日移植の場合、7 月5 日～8 月10 日）が適用期間とされている。ただし箱施薬が行われた圃場では、その持続期間中はBLASTAMは使用できない。
(3) 葉いもちは、菌の侵入から発病までの潜伏期間が約1 週間である。そのため、BLASTAMによる感染（準感染）好適条件が現れた場合、感染株では約1週間後から初発生あるいは病斑数の急激な増加が予想できる。
(4)BLASTAMによる感染（準感染）好適条件の出現回数が多いと、その地域の葉いもちの発生面積が増加し、発病程度も著しくなることが予想できる。

表1　イネウンカ類・コブノメイガのトラップ捕獲状況(2025年)

月	日	トビイロウンカ				セジロウンカ				コブノメイガ					
		佐賀県		長崎県		佐賀県		長崎県		佐賀県					長崎県
		佐賀市 ネットトラップ	嬉野市 ライトトラップ	諫早市 ライトトラップ	諫早市 ネットトラップ	佐賀市 ネットトラップ	嬉野市 ライトトラップ	諫早市 ライトトラップ	諫早市 ネットトラップ	佐賀市 フェロモントラップ	神埼市 粘着トラップ(20W蛍光灯)	伊万里市 フェロモントラップ	白石町 フェロモントラップ	武雄市 粘着トラップ(20W蛍光灯)	諫早市 フェロモントラップ
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0		0			0	0
	2日	0	0	0	0	0	0	0	0						0
	3日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0			0	0
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0						0
	5日	0	0	0	0	0	0	0	0						0
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0		0			0	0
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0						0
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0						0
	9日	0	0	0	0	0	0	1	0	0					0
	10日	0	0	0	0	0	2	4	0		0			0	1
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0						0
	12日	0	0	0	0	0	1	1	0						0
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0		0			0	0
	14日	0	0	0	0	1	0	1	0						3
	15日	0	0	0	0	0	0	0	0						0
	16日	0	2	0	0	3	9	0	0	0	0	0		1	7
	17日	0	0	0	0	0	4	0	0		0				1
	18日	0	0	0	0	3	4	0	4			0			0
	19日	0	0	0	0	0	2	0	0		1		0	1	6
	20日	0	0	0	0	0	0	0	0			0			0
	21日	0	0	0	0	1	1	0	0						0
	22日	0	1	0	0	0	26	0	1						0
	23日	0	2	0	0	2	126	2	0	0					0
	24日	0	0		0	2	139		0		0		0	0	2
	25日	0	0		0	2	12		0			2			1
	26日	0	0		0	1	8		0						0
	27日	0	0			0	7				0		0	1	
	28日	0	0			0	1								
	29日	0				0									
	30日	0				0									

注1)ウンカ類:佐賀市のネットトラップは、農業試験研究センターで調査(回収日で集計)。嬉野ライトトラップ(予察灯)は農業技術防除センターで調査。
6月29～30日の嬉野ライトトラップは、装置の不具合により欠測。
注2)コブノメイガ:神埼市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。
※長崎県のデータは、長崎県農林技術開発センター　環境研究部門　病害虫発生予察室提供。

- セジロウンカとトビイロウンカは６月１６日～２３日に飛来が確認されている。
- 今後の飛来状況や圃場条件（移植時期や品種、圃場の場所等）によってウンカ類の発生量は異なるため、注意深く圃場を観察し、発生が多くみられる場合は速やかに防除を行う。

トビイロウンカ防除適期
1回目　8/5～8/11
2回目　9/4～9/10

図　トビイロウンカ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）

コブノメイガ防除適期
1回目　8/4～8/13
2回目　9/8～9/18

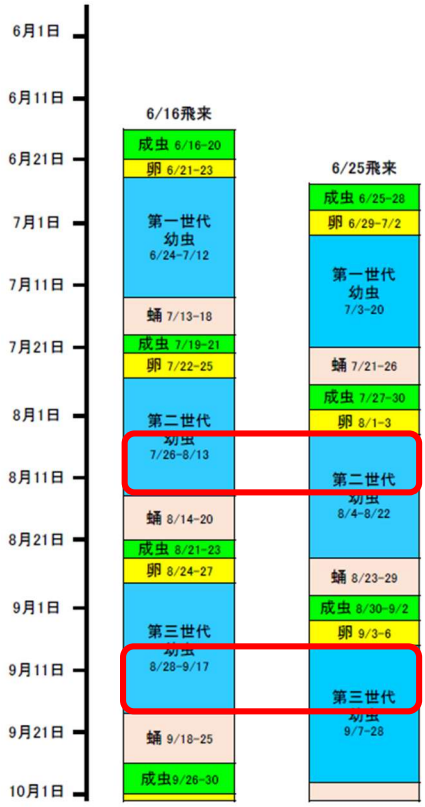


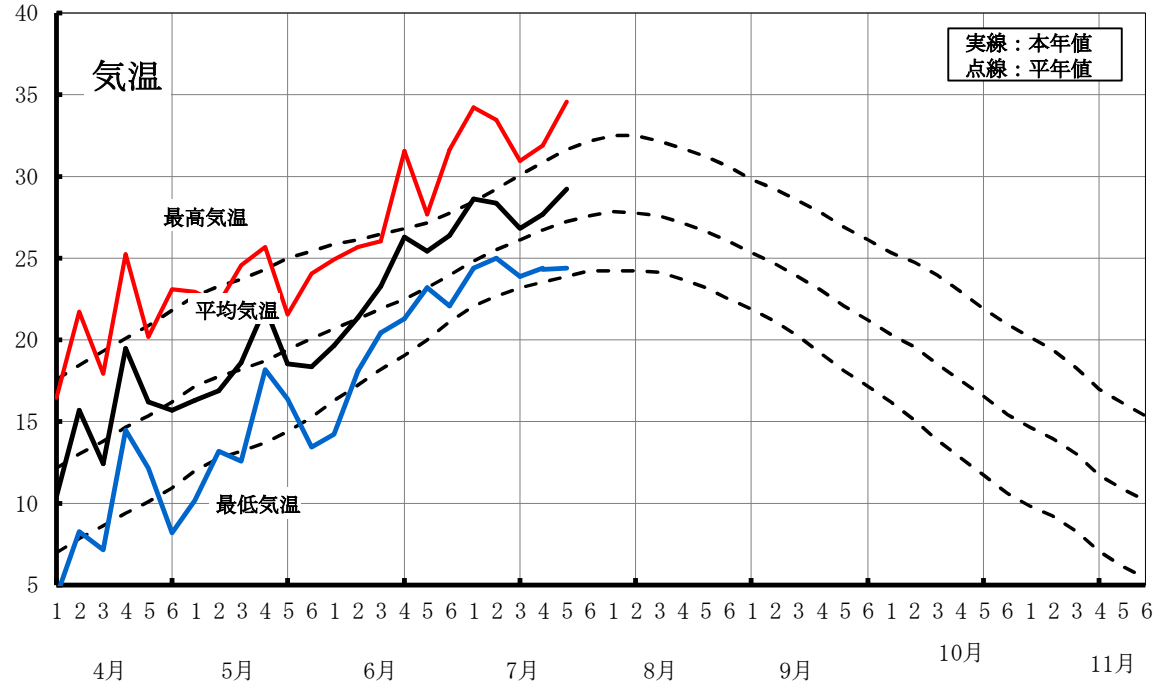
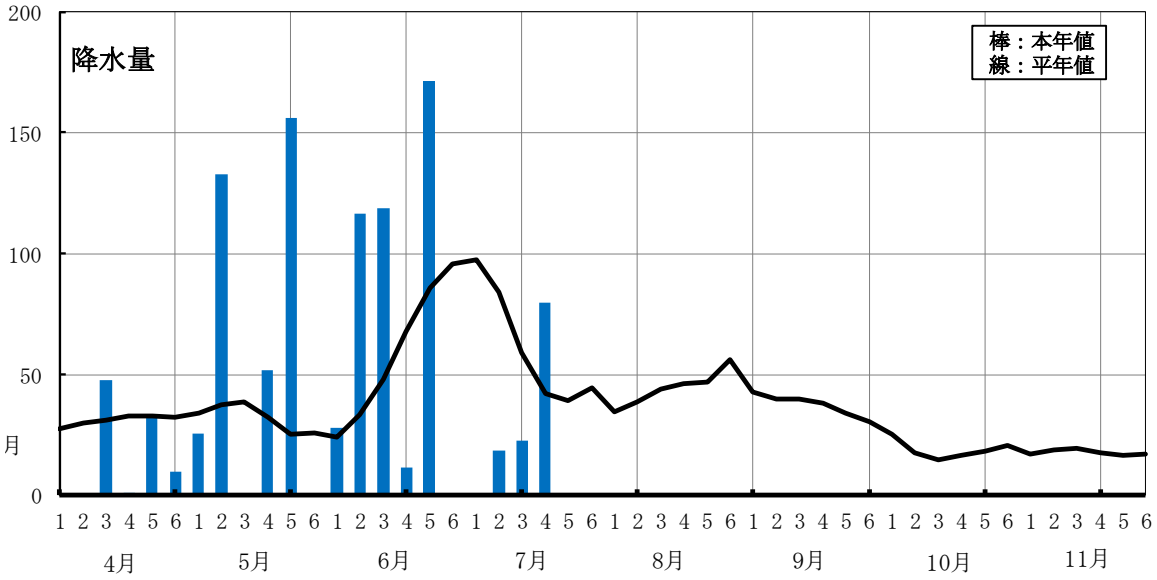
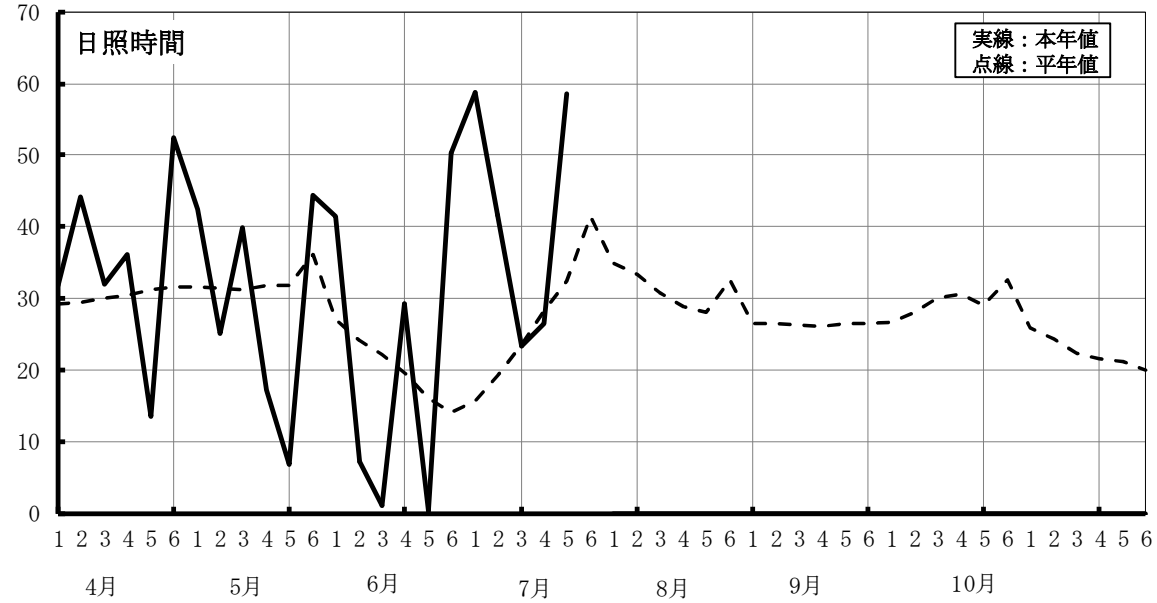
図　コブノメイガ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）

- 今後の飛来状況や圃場条件（移植時期や品種、圃場の場所等）によってウンカ類の発生量は異なるため、注意深く圃場を観察し（ウンカは稲の株元に定着します）。発生が多くみられる場合は速やかに防除を行う。

ウンカ類幼虫の見分け方について

	若齢幼虫の体色	中～老齢幼虫の体色	水面での後脚の出し方
セジロウンカ	白っぽい	灰白の斑紋	:真横
トビイロウンカ	白っぽい	薄茶か茶褐色	:真横～やや斜め後ろ
ヒメトビウンカ	黄褐色	淡黄色か薄茶か茶褐色 （体側の色が濃い場合あり）	:斜め後ろ

		トビイロウンカ	セジロウンカ	ヒメトビウンカ
成虫				
幼虫	若齢			
	中齢～老齢			

令和7年産水稲生育期間気象グラフ（アメダス：伊万里）

西松浦農業振興センター